

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 年～2012 年

課題番号：22520632

研究課題名（和文）メタ認知促進のための学習支援法の開発と実践的活用に関する統合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study on the Scaffolding for Remedial Learners to Improve Metacognitive Ability in English Language in Japan

研究代表者

大崎 さつき（OSAKI SATSUKI）

創価大学・文学部・准教授

研究者番号：70546366

研究成果の概要（和文）：本研究では、初歩の段階で英語学習に躓いている学習者のメタ認知的活動を明らかにしたうえで、どのような学習支援法が学習者のメタ認知向上に有効であるかを検討し、2つのメタ認知能力向上のための学習支援法を開発した。ひとつは読解時の辞書使用における Can-do リストの開発、もう一つは習熟度レベルに応じたディクトグロスの実践方法の開発である。これらは今後の英語教育において自律した学習者を育成するための学習支援ツールとして、また、学習意欲を喚起するために教員が使用する支援ツールとなる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to explore the scaffolding for remedial learners to improve metacognitive ability in English Language in Japan. In order to develop scaffolding tools for effective learning, two studies were conducted. One aimed to develop a can-do list that enables learners to visualize their process of dictionary search. It is aimed for remedial students to develop their metacognitive abilities through reflecting on their search behavior. The other aimed to make dictogloss activity more effective to enhance lower-level students' awareness of language form through collaborative dialogue. The results showed there is a possibility that using the can-do list and dictogloss could help learners' metacognitive abilities improve. Therefore, these tools may not only be able to help remedial learners become autonomous, but also can be tools for teachers to help their students motivated in the classroom.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 22 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
平成 23 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 24 年度	799,982	240,000	1,039,982
年度			
年度			
総計	2,999,982	900,000	3,899,982

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：メタ認知・自律研究・動機づけ研究・Can-do リスト・ディクトグロス

1. 研究開始当初の背景

メタ認知の概念は「認知についての認知」として示されることが多い。また、メタ認知は、認知についての知識であるメタ認知的知識と、自己の認知をモニタリングしたりコントロールしたりするメタ認知的活動という2つの側面から構成されている(Flavell, 1979)。また、メタ認知能力とは、メタ認知的知識とメタ認知的活動の両方をうまく使える能力、つまり自己理解を進め、自己の考え方や思考のパターンを認知することによって、自己の行動を制御・決定していく能力のことである。大崎・中山(2009)や酒井(2009)は、低学力の学習者の特徴のひとつとして、特にメタ認知的活動(計画・モニタリング・評価)に劣っている可能性が高いことから、英語学習の効果を上げられない可能性あることを指摘している。一方、Yamamoto(2009)は、他者からの支援があれば解決可能な領域(Vygotsky, 1934)において、教員の働きなど学習支援の足場作りを与えることによって、低学力の学習者の学習意欲が高まり達成感を持つことができると報告している。これらの研究結果から得られた示唆を基に、低学力の学習者のメタ認知的活動を明らかにし、それを基に学習支援としてどのような足場作りが有効かを検討することとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、低学力の学習者のメタ認知的活動を分析することで、どのような学習支援法が学習者のメタ認知向上に有効であるかを研究することである。学習支援法としては、①学習者に訓練を行いメタ認知的活動ができるようにする方法と、②教員が授業中に学習者の学習意欲を喚起しながら、直接支援することでメタ認知的活動を向上させる方法が考えられる。本研究では、この2つの面に着目し実際の授業の観察および実践を通して、実証的に研究を実施することにする。

3. 研究の方法

(1)辞書を用いた読解活動において、習熟度の高い学習者と低い学習者の検索行動を観察、インタビューすることで彼らのメタ認知的知識とメタ認知的活動を明らかにする。この結果から、低学力の学習者がどのような点において、メタ認知的活動に欠けているかを明らかにする。

(2)先行研究や上記(1)の結果を基に、メタ認知能力向上のためのツールとして、読解時の辞書使用におけるCan-doリストを開発する。開発したCan-doリストを学習者に与え、その影響を検証する。

(3)上記(2)の学習者が個人で行う学習支援法とは別に、授業で協同学習を通して、メタ認知能力を鍛えるツールとして、ディクトグロスという活動に着目した。ディクトグロスとは、学習者がテキスト音声を聞いてメモを取る。そしてメモを頼りに原文を復元する。この原文復元活動は、メモを書き取った単語を使って、自らの中間言語の文法ルールを参照しながら文を再構築しなければならない。その過程でグループディスカッションをすることで、自分のアイデアが正しいかどうかをモニタリングすることができ、間違っている箇所を修正する。つまり、学習者は他者との会話によって自らの学習をモニタリングすることができるようになる。最終的には、このモニタリング活動を通して、学習者は目標言語と自分の中間言語とのギャップに気づくことができるというものである。染谷(2010)はこのようなモニタリングのプロセスは「メタ認知的」なもので、自分の言語使用について考え、議論するという意味で「メタ言語的」なものであり、よい言語の使い手になるために必要な能力であると述べている。しかし、このディクトグロスは4技能を統合的に使う学習方法で、学習者にとっては決して容易ではない。教育実践に活用するためには、学習者のレベルに合わせてやり方や教材を調整する必要がある。そのため、この活動を低学力の学習者にも活用できるように初級レベルの学習者のためのディクトグロス用教材と指導方法を開発する。

4. 研究成果

(1)観察・インタビューで明らかになったメタ認知的活動を可視化するため以下の図1と2のとおり、それらを図式化した。そこから得られた低学力の学習者のメタ認知的活動の特徴は、①身につけている認知方略が少ない(=メタ認知的知識が少ない)、②辞書を引く前に「計画」を立てないため、その後の自分の検索に対する「評価」につながない(=メタ認知的活動の欠如)、③メタ認知的知識の方略的知識などは活用しているが、それを統括する「モニタリング」が十分に機能していないということであった(=メタ認知的活動の欠如)。

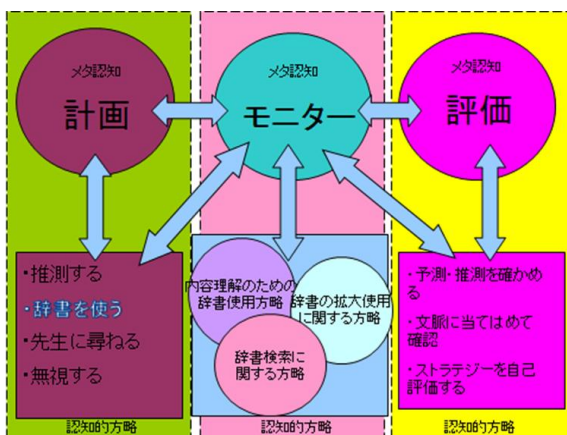


図1 高学力学習者のメタ認知的活動

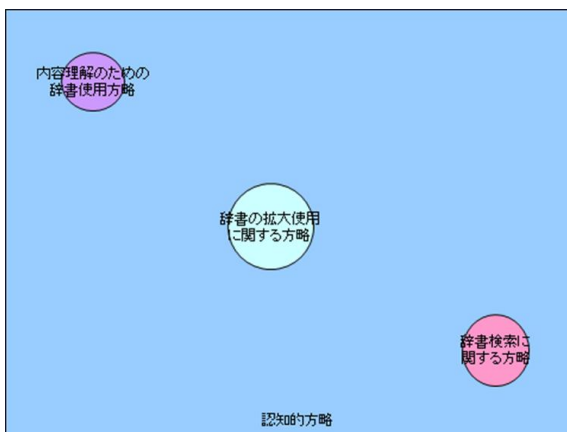


図2 低学力学習者のメタ認知的活動

(2) 先行研究や上記(1)の結果を基に、特にメタ認知的活動を鍛えるツールという点を重視して Can-do リストを開発した。次に、この開発した Can-do リストの実証的研究として、読解時にこの Can-do リストを学習者に与えてその影響を検証した。その結果、習熟度に関わらず、Can-do リストの使用は、学習者に自らのメタ認知的活動を振り返る機会を与えており、特に低学力の学習者にとって、Can-do リストの使用は、メタ認知的知識自体を有していない、あるいは知識を有していると思っているが、活用できないものがあることを自ら「気づく」きっかけとなっていることがわかった。つまり、低学力学習者にとって、Can-do リストの存在が「足場かけ」の役割を果たしており、メタ認知能力を向上させる可能性があることがわかった。

(3) 異なるレベルの学習者を対象としたクラスにおいてディクトグロスを実践し、それぞれのクラスで見られた学習者の「気づき」を質的に分析した。特に低学力の学習者の「気づき」の特徴としては、自分自身の英語力、例えば、単語やスペリングに関する「気

づき」、いわゆる「自己モニタータイプ」の「気づき」が多くみられた。このように各習熟度レベルの「気づき」を分析することで学習者のレベルに合わせたディクトグロスの実践方法を開発した(表1)。たとえば、初級者を対象としたクラスでは、授業で使った教科書の本文をそのまま使うのではなく、ディクトグロス用に教材をやさしく書き下したり、メモを取りやすいように、各文の最初の単語をあらかじめディクトグロスシートに載せておくなどの工夫を加える。また、パッセージを使うのではなく、それぞれ独立した複数の英文をまとめて読み上げるという形式で行うなどの方法である。このように、学習者のレベルに合わせた調整を行うことで、ディクトグロスを通じた学習者の「気づき」を促すことができ、結果として学習効果を高めることができることが明らかになった。「気づき」を促すことができ、学習効果を高めることができたということは、学習者が原文復元作業の中でモニタリング活動を行ったということであり、メタ認知能力の向上につながる結果となったといえるだろう。

表1 学習者のレベルに合わせたディクトグロスの実践方法

レベル	実践上の工夫	期待される学習効果
上級	特に補助を加えることをせず、従来通りの手順でディクトグロスを行う。使用する教材やディクトグロスシートにも特に手は加えない。	Accuracy の向上 メタ認知ストラテジーの育成
中級	最初は学習者にとってやさしめの教材を使い、慣れてきたら、やや難しいものへと移行する。また、メモを取りやすくするために、ディクトグロスシートにキーワードや文の書きだしの単語をあらかじめ載せておく。	自己モニタータイプの気づきから、ストラテジータイプの気づきへと移行することで、学習者の自律をより促すことができる。
初級	活動に慣れるために、最初は独立した複数の文から成る教材を使用することも可。パッセージを使用する際は、短く平易な英語で書かれたものが適切。また、中級レベルと同様に、ディクトグロスシートに工夫を加える。	学習者自身が自分の英語力をモニタリングすることで、弱点に気づくことができる。

(4) これらの学習支援は単発で終わらせるのではなく、繰り返し行うことが大切である。最初から学習者に多くの気づきを求めるのは現実的ではない。何回も繰り返すうちに、学習者自身が活動に慣れ、自分の学習活動を振り返る余裕が生まれる。あせって結果を求

めるのではなく、地道に活動を続けることで、学習者の中に言語習得につながる「気づき」が生まれてくるということを、教師も学習者も忘れてはならない。自律した学習者を育成するための学習支援ツールとして、また、学習意欲を喚起するために教員が使用する支援ツールとして、この研究結果が今後の英語教育の一助となることを願う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

①山本成代、Dictogloss Activities through Collaborative Dialogue for Lower Level Students、リメディアル教育研究、査読有、vol. 6、no. 2、2011、pp. 41-50

②大崎さつき・中山夏恵、リメディアル教育における辞書指導のための研究、リメディアル教育研究、査読有、vol. 6、no. 1、2011、pp. 47-54

[学会発表] (計 15 件)

①大崎さつき・中山夏恵、メタ認知育成のための受容的辞書使用チェックリスト開発の試み、関東甲信越英語教育学会第 36 回群馬研究大会、2012 年 8 月 19 日、共愛前橋国際大学

②山本成代、ディクトグロス(dictogloss)を活用した英語授業ワークショップ、日本メディア英語学会東日本地区研究例会、2012 年 3 月 10 日、早稲田大学

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大崎 さつき (OSAKI SATSUKI)
創価大学・文学部・准教授
研究者番号：70546366

(2) 研究分担者

山本成代 (YAMAMOTO SHIGEYO)
創価大学・ワールドランゲージセンター・
講師
研究者番号：40460092
中山 夏恵 (NAKAYAMA NATSUE)
共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・
准教授
研究者番号：50406287

(3) 連携研究者

酒井志延 (SAKAI SHIEN)
千葉商科大学・商経学部・教授
研究者番号：30289780

臼倉美里 (USUKURA MISATO)
昭和女子大学・人間文化学部英語コミュニ
ケーション学科・助教
研究者番号：00567084

清田洋一 (KIYOTA YOICHI)
明星大学・教育学部・准教授
研究者番号：60513843